



Kokushikan
University

FD News letter

国土館大学 FD ニュースレター

May 2021

Vol. 11

編集・発行／国土館大学FD委員会
発行日／令和3（2021）年5月23日
〒154-8515 東京都世田谷区世田谷4-28-1
TEL.03-5481-5386



コロナ禍のもとでのFD活動 FD委員会委員長 長谷川 均

令和2年度はコロナ禍に振り回された一年でした。国土館大学では、令和2年3月24日の文部科学省通知「令和2年度における大学等の授業の開始等について（通知）」を受け授業日程の変更を行い、5月11日からオンライン授業の開始が決定されました。その直後から、教務部が中心となって教員へのアンケートを実施し、オンライン授業の形態を整理し、サポート体制や受講環境の準備を始めました。その後、オンライン授業のためのツールの選定、機材の確保、LMS（Learning Management System）として導入していたmanabaの基本操作や資料をアップする方法に関する新マニュアルの作成、サーバへの負荷対応、Zoomアカウントの配布をしてその日を迎えました。法人の決断で全学生に一律8万円の遠隔授業給付金を支給したこともあり、スムーズにオンライン授業への移行ができたものと思っています。

本学では、平成25年から講義支援システムとしてmanabaを導入していましたが、一部の教員を除き十分に使いこなすことができないまま運用されていたというのが現状でした。そんな中、4月の半ば過ぎには対面授業と変わらない質とレベルを維持するための教育環境整備を終え、manabaを使いオンライン授業に臨むことになったのです。この間の教務部や情報システム課と教員の協働作業はみごとなものでした。情報システム課は、詳細なマニュアルをいくつも作成し提供しました。多くの教員はこれらを頼りにmanabaを、そしてZoomを使って授業を始めることができました。FD委員会では、4月以降シンポジウムや講習会を開催してきました。シンポジウムは全てZoomを使ったオンライン形式で、講習会はオンラインと対面の併用で実施し、また多くの動画を配信しました。従来の対面形式のFDシンポジウムに比

べ、多くの参加者を得ることができました。令和2年度における、シンポジウムと講習会への参加者は全学専任教員の82%に達しました。それだけ教員の関心を集めた、あるいは教員の危機感が強かったことがこの数字に表れています。

FD委員会では、この一年間で蓄積されたオンライン授業を保存し生かすことを検討しました。本学で一年間に実施される授業科目は、大学院を含め7000科目にのぼります。この一年で膨大な講義関係のアーカイブが構築されたこととなります。これらを新任教員の教育用や公開授業の対象、授業の改善、改良に向けた教員用相互で使用する資料として使えないか検討した結果「私のイチオシ授業」と銘打って、試みにLMS上に自薦授業のアーカイブを作成し公開しています。ただ数は決して多くありません。多くの教員による内発的な資料の提供を期待しています。

コロナ禍対策として始まったオンライン授業は、大学の在り方を変えようとしています。大学と教員はコロナ後に向けてICTを活用して教育の効率化と深化を進められるか、変容を迫られています。さらに、学生の成長を計る「アセスメントテスト」が多くの大学で導入され、同時に担当教員や学生はLMSで学習成果を常に確認できます。教員はアセスメントテストの結果を参考に学生と向かい合うことになります。このコロナ禍がきっかけになるかもしれない教育のパラダイムシフトに、好むと好まざるとに関わらず私たちは対峙することになります。

FD活動や授業の工夫は試行錯誤の繰り返しです。今後も教育効果を生み大学の個性を生かした教育を展開するために、FD委員会では学生の声が生かされた授業の工夫を提案していきますので、引き続きFD活動への理解を求めます。



ワーキンググループ (WG) 活動報告

■第1WG活動報告

第1WGは、「アクティブ・ラーニングの実践例の報告および実践集作成」について検討してきた。

1. 本学の事例収集

新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) の対応により遠隔授業となったことから、FD シンポジウムでの本年度春期授業実践報告を通じて、アクティブ・ラーニング事例を収集した。教員の実施した授業形態は、オンデマンド型 (55%)、同時双方向型 (50%)、資料配信型 (59%) と偏りなく、また組み合わせて展開されていたことがわかった。同時双方向型授業ではグループワークやリアルタイムでの指導といったアクティブ・ラーニングが展開された一方、オンデマンド型などの授業では小テストやレポート (学生へのフィードバックをとまう) といったアクティブ・ラーニングが展開されていた。

2. 100・105分授業

+10・15分をアクティブ・ラーニングのための時間として有効活用する方法について検討した。特に、大教室でのアクティブ・ラーニング法を議論した。

玉川大学の「アクティブラーニング事例集」では、ディベートや反転授業などのテクニカルなものだけでなく、小テストや振り返りコメントなどでも十分にアクティブ・ラーニングになり得ることが学生アンケート調査結果から分かっており、本年度のmanaba活用経験が無駄にしないためにも、自動採点機能を用いた復習問題やアンケート調査の解説やコメントなどで大教室でも過負担なくアクティブ・ラーニングを実践できるのではないかという意見が提示された。

3. 課題

(1) ハイブリッド授業

ハイブリッド授業における実技・実習・実験を中心とする授業の対応や、ハイブリッド授業での成績評価の在り方について課題が残ることを確認した。

(2) オンライン授業の蓄積と活用

オンライン授業を授業以外で使用する場合は著作権法に抵触する恐れがあり、「自らが選ぶ“イチオシ”オンライン授業」への蓄積・活用をどのような形で進めていくか課題が残ることを確認した。

第1WG座長 宮原裕一

■第2WG活動報告

第2WGは「ループリック作成の報告および実践集作成」というテーマで活動を行なった。構成委員は三谷華代 (経営学部)、古坂正人 (政経学部)、吉原裕一 (文学部)、名越篤史 (理工学部)、喜熨斗智也 (救急システム研究科)、川島耕司 (政経学部)、池元有一 (経営学部)、辰野文理 (法学部)、高野敏春 (法学研究科)、栗原通世 (グローバルアジア研究科)、高橋幸

雄 (理工学部) であった (敬称略)。

具体的な検討事項はループリック事例集の作成、ループリックを授業等に運用した際の報告を付記する形での運用実態を明らかにすることである。まず各教員の「ループリック」作成への取り組み事例を収集し、これらの運用における利点や課題などについてワーキングメンバーで議論を行なった。ループリックを授業等に活用した際には、学生のレポートの体裁などの基本的な事項が改善された、学生との対話やフィードバックを具体的に示すことができたなどのメリットもあるが、学生に伝わらないことが多い評価項目や基準をどの程度の内容で記載するかについての調整が困難である等の課題が報告された。またループリックの活用を学内で普及していくために何が必要なのかという点についても議論を行なった。科目シラバスに記載される「評価基準」、「具体的な評価方法」をループリックに対応できるように記述することで、シラバス作成時にループリックが作成できるのではという意見があった。各科目の「評価基準」、「具体的な評価方法」をどのように記載するのかは、先行事例の調査を含めて検討が必要であると考えられる。

他の教育ツールがそうであるように、ループリックは授業内容や運用形態に合わせて正しく運用しなければ期待する効果は得ることが出来ない。今年度の活動ではループリックの運用実態に関する種々の意見交換を行なった。今後の課題として、ループリックを運用する際の運用手順書やチェック項目をまとめることが挙げられる。

第2WG座長 高橋幸雄

■第3WG活動報告

第3WGでは、他のWGの活動テーマ以外の「授業改善に向けてのその他の取り組み」について、WGメンバーが個々に調査・検討し、各種の報告がなされた。以下概略である。

(1) 政経学部における初年次教育 (フレッシュマン・ゼミナール) の見直しについて

政経学部では、初年次教育で学ばせるべき内容を整理し、その中で見出された課題を解決するための素地を学部内のプロジェクトチームで作った。次年度は学部に設けられた「初年次教育改革検討委員会」にて本格的に改革を進めていく。

(2) 大学院教育における遠隔授業—その効果と問題点—

政治学研究科の遠隔授業における研究指導を対象として、実践例および担当教員へのアンケートから、社会人や遠隔地在住者を対象にした遠隔教育の可能性や、遠隔を前提とした教育環境の整備などの課題を見出した。

(3) オンライン授業サポートの取り組み

体育学部およびスポーツ・システム研究科では、manabaコースとオンライン授業相談窓口を開設し

た。相談内容に基づいてオンライン授業サポート動画を合計27本作成し、また個別研修を41回実施することで、オンライン授業の円滑化をサポートした。

(4) オンライン授業を今後どのように対面授業に取り入れていくのか

21世紀アジア学部では、ハイブリッド型授業において、学年および授業形態によって対面参加率とWeb参加率に違いがあることを把握した。また副次的成果として、ハイブリッド型授業により印刷物が5%程度まで抑制された。

(5) 講義科目における反転授業——多様なICTツールの活用可能性を探る

ICTツールと反転授業の親和性について整理し、通常の反転授業に加えて、新たな反転授業設計の可能性を提案した。

(6) 修学困難な学生への対応策について

令和2年度にオンライン授業が実践され、修学困難

な学生に対して積極的改善策の具体的進展へつながる契機となった。今後、退学者抑制における有効な手段として、継続的にオンライン授業に関する課題を解決していく。

(7) 産業界及び実務家との授業における交流

法学部において、ゲスト講師を招いてオンライン公開講座を実施し、オンラインならではの幅広い参加者(学部生、大学院生および教員まで)を得た。秋期にはハイフレックス型授業やオンラインアクティブラーニングも実施し、成果と課題を整理した。

(8) 保健体育部会のオンライン授業の効果測定について

保健体育部会の体育実習・スポーツ実習におけるオンライン授業に対して、学生アンケートから9割以上の学生について運動習慣およびトレーニングに関する知識が身に付いたことが明らかになった。

第3 WG 座長 河野 寛

国土舘大学 FDシンポジウム、FD講習会、内容報告

第22回FDシンポジウム

テーマ：『オンライン授業実践報告会 ～更なる質向上に向けて～』

開催日時：令和2年6月27日(土) 12:30~16:45

開催方法：Zoomによるオンライン

22回目となるFDシンポジウムは、新型コロナウイルス感染症の影響を受け、大学の授業形式がオンラインへと変更された中での開催となった。多くの教員がこの変更に対応を迫られる状況の中で、今回のテーマが「オンライン授業の実践報告」という喫緊の課題に対応するものでもあったことから、約200名というこれまでにない規模の教員が参加した。

第一部は、「国土舘大学におけるオンライン授業の現状」というテーマで、辰野文理教務部長より、本学におけるオンライン授業決定の経過と対応の現状について報告をいただいた。オンライン授業決定後のmanabaやZoomのマニュアル作成等の準備、「リアルタイム型」「オンデマンド型」「資料配信型」を柱とするオンライン授業の展開、その後の影響など、総合的な状況のほか、オンライン授業の課題と今後の可能性について説明をいただいた。

第二部では、「オンライン授業実施報告」というテーマで、4月から開始されたオンライン授業の実践について、11名の委員から報告をいただいた。オンデマンド型とリアルタイム型、あるいはその併用という形式での授業実践について報告があり、ICTの活用などの工夫のほか、学生の学習効果や、フィードバック・評価方法などの課題など幅広い実践報告が行われた。

第三部では、「オンライン授業を受講した学生お

よび教員の声」というテーマで、学長室IR課より説明があった。学生および教員への調査結果からは、大半の学生が授業に満足していることと、教員側の試行錯誤が奏功している旨が報告された。

そして最後に、入澤充学長室長による総括と、和田義浩FD委員会副委員長による閉会挨拶をいただいた。

今回のシンポジウムは、コロナ禍という状況にもかかわらず、いずれの学部とも限られた準備期間の中で非常に優れたオンライン授業の実践を展開している様子が伺われ、困難を乗り越えようとする教員の団結力と、授業への熱意を感じる貴重な機会となった。オンライン授業の実施は、今後の授業実践のさらなる展開にとっても重要な一歩となったと思われる。ご参加いただいた全ての皆様に改めて御礼申し上げます。

宍倉悠太 (FDer)

第23回FDシンポジウム

テーマ：『春期オンライン授業の組織的な取り組みと今後の在り方 ～オンライン授業の質向上を目指して～』

開催日時：令和2年9月12日(土) 13:00~16:30

開催方法：Zoomによるオンライン

第23回FDシンポジウムは、「春期オンライン授業の組織的な取り組みと今後のあり方 ～オンライン授業の質向上を目指して～」をテーマとして開催された。

和田義浩FD委員会副委員長から挨拶および趣旨説明の後、佐藤圭一学長による挨拶があり、第I部の講演へと進んだ。

第Ⅰ部は、「全学オンライン授業の取り組みについて」と題して入澤充学長室長から報告がなされた。前回のFDシンポジウムからの流れを紹介しつつ、春期のオンライン授業に関する概観および課題が示された。IR課による調査結果および授業評価アンケート結果をもとに、授業改善および授業のタイプ（講義、演習、実習など）に合わせた適切なオンライン授業方法の選択が提言された。

第Ⅱ部では、「学部別オンライン授業の取り組みと今後の課題」について、各学部の教務主任による報告がなされた。各学部の特性に合わせた様々な取り組みが紹介されると同時に、多くの成果と課題が示された。参加者全員に各学部のオンライン授業の実態や組織体制が共有されたことが大きな収穫と言える。

第Ⅲ部は、「役職者」「学年担任」「授業タイプ（オンデマンド型、資料配信型、リアルタイム型）」などを軸として14のグループに分かれ、「オンライン授業と学生支援」について、グループディスカッションを行なった。学生支援において、オンラインの取り組みで上手くいった点、また苦慮した点など、各教員が持つ情報や課題を共有した。このグループディスカッションでは、相談しづらい状況の中、悩みを抱える教員にとって秋期からのオンライン授業実施への助けとなった。

最後に、長谷川均FD委員会委員長から挨拶と発表者への謝意が示され、シンポジウムが閉会した。今回のシンポジウムは、春期の大きなパラダイムシフトを乗り越え、多くの課題を目の前にした教員が、例年以上の問題意識を持って参加したことは言うまでもない。これほどまでに授業方法に関して、教員間のコミュニケーションを必要としたことはあったのだろうか。コロナ対応に限らず、今後も授業改善のために本学のFD活動が必要とされる機会は多くなり、FDシンポジウムの果たす役割はより一層増えることは間違いないであろう。 河野 寛 (FDer)

第24回FDシンポジウム

テーマ：『令和2年度FD委員会の取り組み及びハイブリッド型授業情報交換会』

開催日時：令和3年3月13日(土) 13:00~15:40

開催方法：Zoomによるオンライン

「令和2年度FD委員会の取り組み及び令和3年度授業方針とハイブリッド型授業情報交換会」をテーマとして、3部構成でシンポジウムを開催した。まず和田義浩FD委員会副委員長による開会挨拶と趣旨説明、佐藤圭一学長より参加者への挨拶が行われた。その後、第Ⅰ部では各ワーキンググループの活動報告が行われた。第1WGの宮原裕一座長からテーマである「アクティブラーニングの実践例の報告および実践集作成」について、シラバスの授業形態にアクティブ・ラーニングであること

を明示することの重要性が示された。

第2WGは私から「ループリックの作成と運用実態」という活動目的について紹介を行なった。本WGでは各部署のループリック活用状況について情報共有し、ループリックを普及するための課題についての報告を行なった。シラバスの学習到達目標や評価の基準からループリックが作成でき、これによりループリックの活用が全学的に展開できる可能性があることをまとめた。

第3WGの河野寛座長から「授業改善に向けてのその他の取り組みの報告」としてWGメンバーがオンライン授業を実施していく中での問題点や有効性について報告があった。

第Ⅱ部では入澤充学長室長より「令和3年度授業方針」と題して令和3年度の授業方針やその実施方法が説明された。令和3年度の授業は原則対面授業とするが、状況に応じてオンライン形式を取り入れることが説明された。

第Ⅲ部では「ハイブリッド型授業情報交換会」をテーマにグループディスカッションを行なった。ハイブリッド型授業のA. 経験者グループ、B. 未経験者グループの2つに分かれ、A. についてはさらに講義、実験・実習・実技、演習の3つのグループに分かれて情報交換を行なった。それぞれのグループではハイブリッド型授業に関しての実践例や懸念事項が熱心に報告された。

最後に長谷川均FD委員会委員長より閉会挨拶が行われた。 高橋幸雄 (FDer)

第1回FD講習会

テーマ：「学生の心をつかむ話し方講座 ～更なる授業改善に向けて～」

開催方法：オンデマンド型配信（一部対面）

防災・救急救助総合研究所 山崎登先生による「学生の心をつかむ話し方講座」が実施されました。5月以降、私たちはオンライン授業の実施を続けてきました。秋期に入ってからにはこれに加えて、対面授業、あるいはハイブリッドという形で講義を続けてきました。この間、教員のICTスキルは著しく向上したと思われますが、その一方で学生からは「声が大きすぎて、何を言っているのか分からない。滑舌わるすぎ、言語不明瞭」等の苦情があがってきていたのもまた事実です。

授業を行なうにあたって、「何を話しているのかよくわかりません」というのは致命的であるとの考えのもと、今回の企画が生まれました。NHK解説委員の経験を持つ先生によるセミナーでは、数値化された学生からの授業評価以外、指摘も批評も受けない私たちの授業が、いかに独りよがりなものを思い知らされる機会となりました。山崎先生には、即決という形でこの無理難題を引き受けていただき

ました。本当に感謝申し上げます。

講座のなかで、山崎先生は講義前の発声練習から始めよとアドバイスされました。また、井上ひさし氏の言葉を引用され「むずかしいことをやさしく、やさしいことをふかく、ふかいことをおもしろく…」を忘れないようにと言われました。何のための、誰のための授業か、学修者本位の授業への目覚めをさせていただいたセミナーでした。なお、この講習会は学内公開のほか、先生のご承諾を得て新任教員の研修でも使用させていただくことになっています。

長谷川 均 (FD委員会委員長)

第2回FD講習会

テーマ：「ハイブリッド型授業の実践」

開催日時：令和3年2月15日(月)～3月5日(金)

開催方法：対面およびZoomによるオンライン

令和2年度は、オンライン授業の実施が課題であっ

た。令和3年度は、「withコロナ」といわれる状況の下、原則として対面授業が再開されるため、ハイフレックス授業の実施が課題となる。設備は限られ、十分なノウハウも蓄積されていない中、どれだけのことができるかを探るための試みとして、「ハイフレックス授業をどのように行うか」についての検討が、対面・オンラインでの参加者の協力の下、ハイフレックス方式で行われた。この講習会が成立したこと自体が、ハイフレックス授業の実践が現状でも必ずしも不可能ではないことの証左となったのではない。

ハイフレックス授業の実施は、「心配しているよりはなんとかできるが、イメージするほどはうまくいかない」というのが率直な感想である。「完璧」を目指すのは無理である。まずはとにかくやってみる、そして、情報交換によってノウハウを蓄積する、これが今FD活動に求められていることだといえよう。

岡部雅人 (法学部)

活動報告

政経学部

貫名貴洋

令和2年度はコロナ禍への対策として、5月11日の春期授業開始に先立ち、数名の先生のご協力のもと、オンライン授業のサンプル授業を作成し、manabaを活用して政経学部の教員に公開した。各教員の不安を減らすのに役立ち、授業準備にも大いに役立ったとの声が多数寄せられた。10月教授会後には、オンライン授業と対面授業の両立をより効果的に行うための意見交換会が行われた。

また、「フレッシュマン・ゼミナール見直し検討委員会」が発足し、ワーキンググループで初年次教育のあり方について議論がなされた。令和3年度は「初年次教育改革検討委員会」と新たな学部内組織が発足し、本格的な改革に向けての検討が行われる。

体育学部

井上善弘

体育学部では、学部長、教務主任を中心に「遠隔授業準備に関するサポート」体制の確立と実際の取り組みを行った。4月当初に、学科毎に授業準備のサポートする先生を配置し、各担当は、manaba操作方法やファイルのアップロードする操作手順をまとめた資料や動画を各学科のコースにアップしたり、学科ごとに講習会や研修会を行ったりした。その際、遠隔授業で発生したトラブルと対応や疑問や課題については検討したり、対応を確認したりし、円滑な授業を行えるように対応した。

また、9月以降は、対面授業とオンライン指導を併用したハイブリッド型の授業を展開した。このような取り組みの中で、教員の授業づくりの視点が広がった

り、学生も多様な学び方を実感したりしてきている。次年度以降は、今年度の経験を生かして、個別最適な学びを保証していく。

理工学部

高橋幸雄

理工学部は令和3年2月26日(金)に工学研究科と合同で「オンラインと対面を組み合わせた初年次教育の取組み」と題し澤田忠幸先生(石川県立大学教養教育センター)を講師としオンラインでFD研修会を開催した。澤田先生の「オンラインと対面を組み合わせた初年次教育の取組み」に関する報告を確認し、次年度の対面授業や必要に応じてオンライン形式を組み合わせた教育の取組みについてディスカッションを行った。澤田先生から石川県立大学における初年次教育の内容、実施方法、事後アンケート評価の内容についての紹介があった。コロナ禍においてオンライン授業やハイフレックス型授業で行なった初年次教育の取り組みとオンラインを用いたコミュニティ作りの重要性を確認することが出来た。参加者からは石川県立大学で利用されているMoodleと本学で利用しているmanabaにはどのような違いがあるのか等の質問が出た。40名の理工学部教員が参加し、活発な意見交換が行なわれた。

法学部

岡部雅人

コロナ禍の影響により、多くの局面で当初の計画の変更を余儀なくされたが、法学部では、主にその問題に対応することを目的として、今年度も様々なFD活動が行われた。代表的なものとして、①4月17日、

4月21日の2回にわたり、遠隔授業の実施に先立ち、Zoomを用いてオンラインで行われた、「遠隔授業準備説明会」、②1月12日に、来年度のハイブリッド授業の実施に向けて、Zoomを用いてオンラインで行われた、「FD勉強会」などが挙げられる。また、manabaには学部専用の「遠隔授業」のコースが設けられ、教員間で積極的な情報交換も行われた。

初年度の教養教育ゼミについては、これまでキャリア教育を委託していたベネッセから、リアセックへの変更が議論され、次年度より、これを導入することが決定された。

■文学部

吉原裕一

文学部では、令和元年度に策定した6つの課題を柱とし、その目標を概ね達成すると共に、ほかに自主的なミニFD活動も併せて実施した。具体的には、①文学部FD委員会主体で平成30年度より各学科・コースにて運用している「卒業論文審査のループリック」の活用状況をアンケート調査し、②遠隔授業における初年次教育の充実を図り、各学科・コース主体で「1年生交流会」などのイベントを積極的に行い、③「オンライン授業」の課題やIT関連の知見を教員間で共有するために各コースで会議や講習の機会を設けてミニFD活動を行い、④在学生や本学志望者向けに、文学部広報委員会主体で大学HP上にて各教員のリレーエッセイを掲載した。令和3年度は、今年度の方針を継承すると共に、成果についての自己点検の仕組みの整備などを推進する予定である。

■21世紀アジア学部

桑田てるみ

21世紀アジア学部では、ミニFD研修会を2回実施した。

第1回は、テーマを「遠隔授業の方法：総合演習1の運営方法を例に」として、令和2年4月23日（木）14：20～15：35にZoomで開催した（参加者19名）。内容は、①遠隔授業の基本方針、②総合演習1の運営方針、③manabaを活用した総合演習1運営の事例、④春期遠隔授業全般に関する質疑応答・ディスカッションであった。

第2回は、テーマを「遠隔授業の実施結果と改善：春期授業を振り返って」として、令和2年9月1日（木）14：15～15：15にZoomで開催した（参加者22名）。内容は、①秋期授業の基本方針、②春期授業の振り返り・実践報告、③遠隔授業全般に関する質疑応答・ディスカッションであった。オンデマンド授業における学生とのコミュニケーション方法、リアルタイム授業の工夫等の実践報告が好評だった。

■経営学部

三谷華代

初年次教育として実施しているフレッシュマンゼミナール・ゼミナール入門について、各クラスを担当する教員との話し合いを複数回行った。今年度は学期の

途中で対面授業に移行するタイミングもあったため実施形態についての話し合いや、授業内容について意見交換を行った。短い時間であっても、適宜、情報共有と意見交換を行ったことで大きな問題もなく進められた。成績評価について、前期はループリックまではいかないものの、各クラスに共通した基準を設けて評価できたが、後期は変則的な授業運営であったことや授業内容の特性もあり、共通基準による評価が難しい状況となった。来年度の実施も臨機応変な対応が求められると考えられるため、適宜話し合いを実施しながら、授業運営および内容の充実と授業評価についても改善できるよう努めたい。

■政治学研究科

織田健志

政治学研究科の令和2年度の取り組みとして、昨年度に引き続き、学修支援に重点的に取り組んだ。学生1名に対して、指導教員を含む複数の教員を配置する複数指導体制を継続し、学生一人一人のニーズに応じたきめ細かな指導を行なっている。また、コロナ禍の影響により対面方式が不可能となった修士論文中間発表会（令和2年度は9月下旬に実施）と修士1年・研究生研究発表会（10月下旬に実施）については、manabaを用いたオンライン形式で実施した。manabaを積極的に活用することで、従来と同様、研究科全教員で各学生の学修状況を把握するように努めた。さらに、大学院『政経論集』への投稿や研究会などでの報告の促進、研究生および修士・博士課程学生を対象とした『研究ブリーフィング』の発刊などを通じて、研究成果を社会に積極的に発信するとともに、研究科全体での適切な指導のために活用している。

■経済学研究科

中岡俊介

本研究科では、従来から政経学部との協力関係を通じてFD活動を進めてきた。特に本年度は新型コロナウイルス流行という予想外の状況に直面する中で、オンライン上での授業推進を余儀なくされたこともあり、コンテンツ作成やオンライン授業配信などについて、どの教員も試行錯誤を重ねる一年であった。しかし、このことは必然的に教員にとって、個々によるFD活動の実践を伴うものであったと考えられる。本研究科でも多くの教員が本年度はZoomを使う形でのオンライン上のリアルタイムの授業を実践的に学ぶ状況にあったが、学部との協力を通じた数回に渡るFD講習会の実施はその点で大きく役に立ったものと考えられる。また、これと同時に並行的に、研究科としては新執行部の下でカリキュラム改革などが始められることとなるなど、具体的なFD活動の進展も見られた。

■経営学研究科

宮原裕一

経営学研究科では、令和2年6月23日（火）にオンライン（Zoom）を利用して「遠隔授業における修士論文指導についての情報交換会」をテーマとして、

ミニFD検討会を開催した。ミニFD検討会では、修士論文指導を行う演習担当（大学院2年次）教員全員に対して、遠隔授業における修士論文指導上で困っている点や研究科として対応が必要な点について意見を伺った。また意見聴取後、研究科委員全員で情報交換・意見交換を行った。多種多様な意見のなかで、特に院生が先行研究の文献収集に例年以上に時間を要していることがわかり、どのような方法で文献収集を効率よく行っていくかについて意見交換が行われ、研究科として研究計画書の提出期限について柔軟に対応することが確認された。結果として、大学院2年次生全員が修了に至った。

■スポーツ・システム研究科

永吉英記

コロナ禍でのオンライン授業に対応するため、教員（非常勤含む）に対するmanabaコースとオンライン授業相談窓口を開設し、教員からのオンライン授業に関する相談内容に対して「オンライン授業サポート動画」を随時公開した。令和2年度1年間で、27の解説動画を公開することとなった。解説動画の内容は、manabaについて15動画、Zoomについて7動画、office 365について2動画、Googleについて3動画となった。また、問い合わせがあった教員、研究科助手、教務助手を対象にオンライン授業に関する個別研修を実施した。個別研修は本年度41回であった。研修の内容は、Zoomの使い方9回、manabaの使い方6回、パワーポイント動画作成12回、動画編集8回、Googleフォーム3回、ハイブリッド授業の方法3回となった。他に授業支援クラウド「ロイロノート・スクール」の研修会や、世田谷プラットフォーム主催FDシンポジウムや本学FD講習会への積極的参加を促した。

■救急システム研究科

喜熨斗智也

今年度、救急システム研究科ではオンラインでの講義、研究指導を行う上で基礎となるWeb会議サービスの使用方法、およびオンライン授業の実施方法について学ぶために、国立情報学研究所が主催する「4月からの大学等遠隔授業に関する取組状況共有サイバーシンポジウム」や東京大学 大学総合教育研究所センターが主催する「学びを促す授業のためのzoom講座」など、主にFD推進課からご紹介をいただいたセミナー等への参加を所属教員に促した。

年間を通して、大学院生への遠隔での講義、研究指導については大きな支障なく実施でき、年度末には「シアトルの病院前救急医療体制とハイパフォーマンスCPR」と題してアメリカ合衆国シアトルの救急救命士であるレニー・ノリス氏にオンラインで講演をしていただくなど、今までにない新たな取り組みを実施することができた。

■工学研究科

寺内義典

今年度のFD活動をふりかえると、オンライン授業

の普及とmanaba活用の浸透が大きく進み、授業改善の課題への取組みが急速に進んだ。理工学部と協働でFD研修会「オンラインと対面を組み合わせた初年次教育の取組み」も実施できた。もうひとつの大きな成果としては、学生の学修成果の把握における取組であろう。研究科の優秀修士論文賞を決めるプロセスにおいて、評価表を用いた客観的評価を導入し、学会発表等も点数化した。学修成果の把握という観点では、成果が得られたといえる。

その他にも、3ポリシーの見直しや、就学支援としての修士論文審査における副査を交えた指導体制の強化、秋期から実験実習系科目を中心としたTAによるFDへの学生の取り込みなど、課題解決に向けて着実に歩みを進めている。

■法学研究科

高野敏春

法学研究科は、法的紛争の予備知識を身に付けた人材、特に専門的な法理論および実務理論を教授・研究して法的業務に従事する高度の職業人を養成することを目的としている。

令和2年度は、これまで同様入試説明会の開催（内外問わず年11回）及び日本スポーツ法学会と共催で合同シンポジウムを開催した。令和3年度も内外問わず講演会・企業との研究会を開催し進めていく。

多くの現役生を対象とするスポーツ法コース、社会人を対象とする税・ビジネス法コースも、今まで通りのテーマ発表会、さらに、きめ細かく、中間の報告会などを設けて、実践の社会での総合的な法律知識の習得に努め、アクティブ・ラーニングの導入を行なう。その上、社会で活躍する税理士に集まって頂き、法学会活動を推進したい。

■総合知的財産法学研究科

田邊 恵

大学院総合知的財産法学研究科FD委員会は10名の委員により構成され、月例の研究科委員会及びFD研修会においてFD活動を行っている。

秋期からはオンライン授業に加えて、対面授業、ハイブリッド授業も取り入れ、科目に適した形式で授業及び修論指導が行われた。とりわけ、コロナ禍にもかかわらず知財管理実務論講義において特許事務所には学生の受入れにご協力いただき、無事にアクティブラーニングとしてのエクスターンシップが開催できたことが大きな収穫であった。さらに、学生の学習成果は、弁理士試験、知的財産管理技能検定試験などにより客観的に把握できている。

最後に、当研究科は中間報告会などを通じてオフィス・アワーに限らない指導教授や専門科目担当教員からの履修指導、学習支援及び修士論文指導を積極的に受ける体制が構築され、ラーニングコモンズとしての研究室も十分に利用されていることから教員と学生との議論が活発になされていることが特色となっていることを付け加えておきたい。

■人文科学研究科

夏目琢史

人文科学研究科委員会では、例年、年度初めに3つのポリシーの周知・確認を実施してきたが、本年度は新型コロナウイルスの影響による混乱のため思うように実施できなかった。しかし一方で、学部との連携により、一年を通じてオンライン授業を円滑に進めることができた。また少人数教育の特色を十分に活かし、manaba、Zoomなどのオンラインの機能を効率よく活用し、アクティブ・ラーニングをさらに推進することもできた。学修支援と成果については、「専門地域調査士」「GIS専門学術士」「専修免許」「考古調査士一級」などの資格を得るうえでのキャリア相談などを個別に進めた。また定期的に研究成果の中間・最終報告等を実施し、院生の研究を深めることにも努めた。FDへの学生の取り組みとしては、TAの積極的な活用を継続するとともに、授業時間以外でもmanabaの「掲示板」機能やZoomなどを用い、院生との双方向の対話を一層充実させることができた。

■グローバルアジア研究科

栗原通世

グローバルアジア研究科では、令和2年6月18日にFD研修会として、オンラインで実施した修士論文構想・中間発表会（令和2年5月28日実施）の振り返りを行い、オンラインを利用した学修支援に関する意見交換を行った。研修会ではまず、オンライン上の発表会に関し、大学院生を対象としたアンケート結果が報告された。報告内容は、国外からの参加が可能であったことや時間管理の意識が教室よりも高まったといったオンライン利用の利点、接続トラブルや参加者の表情が見えず発表内容が伝わっているかが不安であったといった問題点などである。次に教員の意見交換が行われた。教員からは使用機器が限られる学生への配慮のほか、遠隔地からの参加も可能といった利点を生かし、オンラインを利用した学修支援の拡充や国外の協定校との連携の可能性など、さまざまな意見があった。

FD関連フォーラム等参加報告

第10回新任教員研修セミナー

開催期間：令和2年8月31日(月)～9月1日(火)
開催方法：Zoomによるオンライン

今日の大学教育は高次思考力が問われる時代へと変化してきたが、物事を主体的に考えて、能動的に学習していくアクティブ・ラーニングを積極的に取り入れていくことが必要とされる。Zoomで行われたセミナーでは、アクティブ・ラーニングの定義や意義、或いは具体的な手法などを学んだ。

また、オンライン授業でのアクティブ・ラーニングの取り入れ方も説明された。例えば、Zoomのブレイクアウト・ルームを使用する際、ペア・ワークは対面授業とは異なり、他の参加者から隔絶されて、心理的な障壁が高くなると指摘された。従って、ビデオ通話ではトリオなどに変えなければならないなど、オンラインならではの工夫が必要であることが改めて理解できた。

多岐にわたる内容が含まれていたが、参考になることが多かった。対面でもオンラインでも積極的にアクティブ・ラーニングを取り入れることを心がけ、より質の良い授業ができるようにしていきたい。

柴田徳光（政経学部）

本セミナーでは、2日間にわたり、7つのセッションが用意され、多様な視点・多角的な切り口から、アクティブ・ラーニングに関して学んだ。特に以下

の3点に絞って報告する。

第一に、学生とのコミュニケーションの重要性の再認識である。学生は、それぞれ多様な価値観・考え方をもち、また家庭環境など背後に抱える諸事情も異なる。従って、一人ひとりの学生に寄り添い、多様性に配慮したコミュニケーションの構築が信頼関係を育んでいく上で、また教育にとっても不可欠の作業であることを学んだ。

第二に、アクティブ・ラーニングの意義や、これをより効果的に機能させるための事前の授業設計の重要性を学んだことにより、その具体的手法などを多様な側面から知ることができた。

第三に、講師の先生方も含めた他大学の多くの新任教員との意見交換等ができたことは大変意義のある経験になった。

この2日間で学んだ事柄を大切に、国士館大学における質の高い教育への貢献、また学生との有意義な学びの実現に向けて努めていきたい。

小林正士（法学部）

本研修は東京都八王子にある大学セミナーハウスで開催する予定だったが、新型コロナウイルス感染拡大によって、Zoomによるオンラインで開催することに変更されました。

本研修では日本全国の大学から36人の新任教員が参加し、2日間にわたり7セッションの研修が行われた。各セッションにおいて、アクティブ・ラー

ニング型の手法を中心にグループワーク、ディスカッション、意見交換などが行なわれた。全セッションの学習内容について、第1に、今日、日本の学生に取り巻く高等教育の環境の背景についての内容。第2にアクティブ・ラーニングに関する理論と手法についての内容の学習。第3に新型コロナによるオンラインの授業様式や多様な生活様式などに対応するアクティブ・ラーニング型授業の実践とその効果を検討しながらの演習と、大きく3つに分類できた。

本研修を受けることによって、多様なアクティブ・ラーニング手法が学習でき、取得したものを今後国士舘大学の授業で活用したいと思う。

ジャクファル・イドルス (21世紀アジア学部)

ループリック評価入門WS

開催日：令和2年6月20日(土)

開催方法：Zoomによるオンライン

本学の建築学系では昨年度から卒業研究の評価法にループリック評価を試験的に取り入れた。ループリック評価については、内容の理解が不十分であったため参加した。

大学教育が「何を教えたか」から「何を学んだか」へと転換したことにより、テストの点数だけではなく、明確かつ公平な評価基準・方法がますます必要となる。

当日は、芝浦工業大学教育イノベーション推進センターの榊原先生が、Zoomを使った同時双方向型の講義・解説を行ない、その合間に教員4名によるワークショップを開催し、各自が自分の授業のループリック評価基準を示していった。他の教員によるループリック評価の事例を聞くことが出来たため、実り多いWSであったと実感した。

ループリック評価法は、教員が学生の理解度を確認するだけでなく、学生が授業で学んだことを整理し、理解度を確認する機会とも、かつその評価は学生にその後の学習を促進させるために行なわれるものであると考えられることから、今後はループリック評価の重要性が一層高まると考えられる。

鈴木 啓 (理工学部)

今年度からFD委員としてFD活動に携わり、第2WGにて「ループリック」について考えることとなった。しかしループリックについては、ほとんど知識がなかったため、基礎固めを目的として今回のワークショップに参加した。本ワークショップは、ループリックの重要性や作成法、注意点等の解説を聞きながら、参加者も一緒にループリックを作成し、少人数のグループに分かれて各自のループリックを共有し、意見交換しあうという流れで進められた。解説においては、ループリックが適している評

価方法（レポートや面接、プレゼン・ディスカッションなど）や、各評価方法における具体的なループリックが紹介されており、大変参考になった。また、他の参加者との意見交換では、自身のループリックの改善点や評価項目設定についての示唆だけでなく、他大学の状況や活用方法も垣間見ることができた。今後のループリック評価の実践につながる有意義なワークショップであった。

三谷華代 (経営学部)

反転授業入門WS

開催日：令和2年6月20日(土)

開催方法：Zoomによるオンライン

反転授業についての事前知識が無く、参加した。反転授業はオンラインに向いているため、本年度になって、ネットでの検索数が急激に増えたという。講義を聞いて授業時間外に演習や課題を解くという従来の授業に対して、事前にビデオ教材等で自己学習させた上で授業では、演習やグループワークを効果的に実践する教授法である。

当日は、芝浦工業大学機械工学科の角田先生が同時双方向型の講義・解説を行ない、その合間に教員3名に分かれて、それぞれが反転授業で行った場合についてのグループワークを行なった。日本各地の大学から専門分野が全く異なる様々な先生方が参加したが、時間が足りないと思うくらいの白熱したグループワークが行われ、反転授業の活用法と有効性を学ぶことが出来た。加えて、他の先生方が日頃、リフレクションペーパーやミニッツペーパー、クリッカー等を使って工夫しながら授業を行っていることも学ぶことが出来たため、意義あるWSになったと感じている。

鈴木 啓 (理工学部)

プレFD「大学教育開発論」

開催期間：令和2年9月30日(水)～12月23日(水)

開催方法：Zoomによるオンライン

9月から隔週で1回3時間にわたって行われる大学教育開発論の講義を受けた。様々な大学から、教育経験のある教員や院生など多様な背景を持つ受講者が参加していた。講義内容は、ループリック評価表やシラバス作成、1コマの授業デザインの作成、それを踏まえた模擬授業など、大学での教育実施に関する基本的な内容を学ぶことができるものであった。毎回の講義形態も、スライドによる座学とグループワークが交互に実施され、休憩時間以外はインプットとアウトプットが適度な頻度で行われた。学部の目標を科目や毎回の講義目標にまで落とし込み、座学とグループワークを1セットとして1回の講義内に複数回組み込んでいく講義は、理想形であ

ると頭でわかっている、なかなか実践できていなかったことであり、自身の授業運営について考えさせられる機会となった。一方通行の講義とならないよう、今回の学びを活かしながら少しずつでも改善していきたい。

三谷華代（経営学部）

開催期間：令和2年5月14日(木)～7月23日(木)
開催方法：Zoomによるオンライン

芝浦工業大学の「大学教育開発論」を受講した。新型コロナウイルスの影響により、Zoomでの受講となったが、グループワークの機能等を使用し、問題なく議論することができた。講義の内容は、主にシラバスの書き方や到達目標の設定の仕方、さらに評価方法について、実際にシラバスを作成することや、半期の設計と1コマの設計を行い、学生の知識の定着や、学習意欲と集中力の向上を図る授業設計を学んだ。今回の受講では「学生目線での授業」ということを常に意識することの難しさを実感した。大学生には自主的自発的な学習が求められるが、それを促進させるような講義を行うために、知識の伝達だけではなく、学生が主体的に学べるような講義を設計することが大事だと思う。さらに、公正公平な評価のためにも、明確な評価基準を定め、到達目標を合わせてシラバスに載せることが第一であると感じた。今後も継続して大学教育の研究を深めていきたいと思う。

横山幸祐（法学研究科）

大学コンソーシアム京都主催「第2回オンライン授業のためのワークショップ」

開催日：令和2年9月25日（金）
開催方法：Zoomによるオンライン

事例1では京都外国語大学の森先生からオンライン授業のタイプについて、それぞれの利点と課題についての提案があった。事例2では京都薬科大学の高尾先生から薬剤師養成における授業の工夫が提案された。対面による演習とオンラインでの講義をどのように実施するか、動画も組み合わせた授業展開例が報告され大いに参考になった。

分科会では、他の大学の先生方と協議する機会を得た。主な内容として、①各大学で使用しているツールのより良い活用方法 ②学生同士が意見を交換するZoomでいえばブレイクアウトルームのより効果的な活用方法 ③ハイブリッド型の授業におけるカメラやパソコンの台数、カメラの撮影時の向きなどの具体的な方法 ④オンラインにおける模擬授業では、各グループの模擬授業を録画することにより相互に学ぶ機会をもつことができるという方法などの情報交換を行った。

このワークショップで得た様々な方法等を自らの講義に生かしていきたい。

藤井千恵子（体育学部）

様々な研修に参加したおかげで、春期授業をリアルタイムに進められるようになった。より効果的なオンライン授業を求めて参加した今回のワークショップでも、収穫があった。話題提供された文系事例では、リアルタイム型の授業では教師と学生、学生同士が対話できることが強みであること、ホワイトボード機能の利便性を再認識した。理系事例では、薬学科目で、短い動画に分けて予習させ、事前説明なども行った上で実験時間を確保している事例が発表された。オンデマンドと対面授業の組み合わせも成果があったとのこと。実験・実習科目はどこでも苦労が続いているだけに、ツールや方法は違っても、学生にとってよりよい学修環境を求める教員が参加するワークショップは刺激になった。今後、オンラインと対面のハイブリッドで模擬授業を予定している。教師側だけでなく、児童役の学生を映すカメラ設置により、オンラインで参加する学生が疎外感をもたないようにできるということは収穫の1つである。たやすい準備ではないが、学生の協力を得ながら失敗も重ねつつ、1つ1つ挑戦していきたい。

五十嵐浩子（体育学部）

大学コンソーシアム京都主催「第5回学習者中心の授業ワークショップ」

開催日：令和2年12月1日（火）
開催方法：Zoomによるオンライン

今回のワークショップは、平成24年中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」で示されたアクティブ・ラーニングの定義から話題提供が行われた。その定義は、『教員による一方向的な講義形式のとは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称』である。学修者が能動的に学修する方法としての発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等がコロナ禍によって制限あるいは不可能になった。フィールドワークを中心とする実践研究が全講義の20%を占める大学からの話題提供でも工夫をしながら段階的に以前のように地域に出始めているとのことであった。

参加者がオンライン授業でうまくいったこと、実施上の課題について意見交換をした。結論が出るものではなかったが、動画等を事前にLMSにアップして、授業では質問の時間を多くとった反転授業、字幕機能を使うことで海外との交流がうまくいった例、様々なゲスト・スピーカーを招聘した例などが報告された。自分もそうだが、考えているよりもまず実践して問題やトラブルを乗り越えることができ

る。ハイブリッド授業で四苦八苦している毎日であるが、学生が主体的に取り組める授業を目指して授業改善に努めたい。
五十嵐浩子（体育学部）

2020年度「全国私立大学FD連携フォーラム」(JPFF) 参加報告

開催日時：令和3年1月20日（水）13:00～16:30
開催方法：Zoomによるオンライン

今年度のJPFFはコロナ禍という特殊事情の中、Zoomによるオンライン形式での開催となった。

JPFF幹事校・会員校ミーティングに続き、FDに関する具体的なテーマについて話し合う「懇談会企画」へと移った。今回は事前に用意されたA：「オンライン授業について」、B：「授業アンケート結果による授業改善状況の可視化について」という

2つのテーマについて、それぞれ6人程度、合計10グループに分かれ、議論を行なった。私はAのテーマを扱うグループに参加、オンライン授業の様々な取り組みに触れ、多くの刺激を得ることができた。

その後の全体会にて、各グループの議論内容について報告が行われ、「オンライン授業」についてはその可能性や問題点、またその延長上にある「ハイブリッド授業」への期待と課題等をめぐり情報共有が行われ、「授業改善の可視化」については、少なからぬ機関において授業改善報告書の作成・提出の義務化、顕彰制度への活用といった具体的取り組みが広がっていることが紹介された。

今回得られた知見を、JPFF会員校である本学の今後のFD活動に活かすべく努力していきたいと思う。
和田義浩（法学部）



FD 委員会活動報告

令和2年度

○FD委員会

- 第1回 令和2年5月23日（土）
- 第2回 令和2年6月27日（土）
- 第3回 令和2年9月19日（土）
- 第4回 令和2年10月31日（土）
- 第5回 令和3年1月30日（土）
- 第6回 令和3年3月13日（土）

○FDシンポジウム

- ※詳細は本誌「内容報告」参照（pp. 3～4）
- 第22回「オンライン授業実践報告会～更なる質向上に向けて～」
開催日：令和2年6月27日（土）
- 第23回「春期オンライン授業の組織的な取り組みと

今後の在り方 ～オンライン授業の質向上を目指して～」

- 開催日：令和2年9月12日（土）
- 第24回「令和2年度FD委員会の取り組み及び令和3年度授業方針とハイブリッド型授業」
開催日：令和3年3月13日（土）

○FD講習会

- ※詳細は本誌「内容報告」参照（pp. 4～5）
- 第1回「学生の心をつかむ話し方講座 ～更なる授業改善に向けて～」
開催日：令和2年11月26日
- 第2回「ハイブリッド型授業の実践」
開催日：令和3年2月15日～3月5日（全8回）

国士舘大学FDポリシー

国士舘大学におけるFD活動は、建学の精神と教学理念の体现である「活学」を重視し、国家社会に貢献する智力と胆力を備えた人材を、心身の鍛練と人格の陶冶を目指す日々の実践を通じて養成する取り組み、ならびに学部・研究科等の各教育研究機関が掲げる理念の実現と教育目標の達成を、全学的に推進することをその目的とする。

そのために、教員は職員と協働し、組織的かつ恒常的に、授業内容や方法ならびにカリキュラム等の改善、また教育組織や制度の整備・発展を目指すとともに、学生の参画を得て、教員の教育力及び学生の学士力の向上を通じて教育の質的転換を促進する。そして、これらの取り組みの妥当性、有効性について継続的に検証を行い、教育の質保証を図る。

こうした活動はまた、教員の研究活動、社会貢献等に関わる教員集団の全般的職能の開発・改善に資するものとして遂行する。

FD 委員会規程

制定 平成21年2月25日

改正 平成27年7月29日

(趣旨)

第1条 国士舘大学の教員の教育研究活動、とりわけ授業内容・方法を改善し、教育能力を向上させるためファカルティ・ディベロップメント（以下「FD」という。）の方策を恒常的に検討し、各学部等において組織的な取り組みを進めることにより、学士力及び研究力を身につけさせる教育を実施することを目的として、FD委員会（以下「委員会」という。）を置く。

(構成)

第2条 委員会は、次の各号に掲げる委員をもって構成する。

- (1) 学長が指名した副学長1名
- (2) 各学部教授会から選出された者各1名
- (3) 各大学院研究科委員会から選出された者各1名
- (4) 各附置研究所所員会から選出された者各1名
- (5) 学長室長、教務部長及び教務部事務部長
- (6) 学長が委嘱した者若干名

2 委員長は前項第1号に定める副学長をもって充て、副委員長は前項第2号から第6号までに定める委員の中から学長が任命する。

3 第1項第2号、第3号、第4号及び第6号の委員の任期は2年とし、再任を妨げない。なお、任期の途中で交代する場合の後任の委員の任期は、前任者の残任期間とする。

(運営)

第3条 委員会は、委員長が招集し、その議長となる。

2 委員長に事故あるときは、副委員長がその職務を行う。

3 委員会は、委員総数の過半数の委員の出席をもって成立する。

4 委員会の議事は、出席委員の過半数をもって議決し、可否同数のときは、議長が決する。

5 委員長は、必要と認めた場合、委員以外の者を出席させ、意見を聴くことができる。

(協議事項)

第4条 委員会は、教育研究活動改善の方策に関する次の事項を協議する。

- (1) FD活動の企画立案に関する事項
- (2) 授業評価の実施の運営方法に関する事項
- (3) 各学部等が行うFDの支援に関する事項
- (4) FDに係る講演会、研修会に関する事項
- (5) FD活動の自己点検・評価に関する事項
- (6) その他FDの推進に必要な事項

(庶務)

第5条 委員会の庶務は、教務部教務課の協力を得て学長室FD推進課が行う。

(改廃手続)

第6条 この規程の改廃は、委員会の議を経て理事会で決定する。

附 則

1 この規程は、平成21年2月25日から施行する。

2 この規程の施行に伴い、最初に委嘱された第2条第1項第2号、第3号、第4号及び第6号の委員の任期は、第2条第3項の規定にかかわらず、平成22年3月31日までとする。

附 則

この規程は、平成27年4月1日から施行する。

編集後記

令和2年度は新型コロナウイルス感染症の影響により、FD委員会がこれまで以上に注目される機会となったと思います。22回から24回までのシンポジウムの参加者が増えたことが何よりもその証左であるといえるでしょう。

他方で、こうしたFDへの注目が形ばかりのものではなく、きちんとした内実を持ったものとして定着しつつあることもまた間違いありません。今回のニュースレターにもあるように、多くの学部・大学院においてFD研修会やミニFDが開催され、非常に熱心な取り組みが行なわれているほか、関連フォーラム等への先生方の積極的な参加の様子も伺われるところです。

また、本年度のFD活動からは、アクティブ・ラーニングに関わる技術面のスキルアップの重要性のみな

らず、その根本でより良い学びの実践を進めようとする教員の「想い」や「熱意」の大切さにも改めて気づかされたように思います。時代が変わり技術が革新しても、大切なのは未来の世界を創っていく人材を育もうとする人の想いであり、それが無ければアクティブ・ラーニングもFDの実践も有名無実化してしまうということを改めて確認させられました。

本学の創立にも深くかかわった渋沢栄一は「もうこれで満足だという時は、すなわち衰える時である。」という言葉を残しています。熱い想いと進取の精神を持った授業改善のたゆまぬ実践が、未来にはばたく国士舘大学の学生を育てることにつながると、自戒を込めて思いました。

(編集委員長：穴倉悠太)